してゐるかを、掌を指すごとく暗記してゐるばかりでない。そのベンチ全部が彼のベットである。しかし使用するに一文も要らない。寝具も枕も要らずただで寝る、これほど安いものはない。さあ、唯根羽安雄氏に御紹介しませうか』

『いやそれには及ばん』

善兵衛はにが虫をかみつぶした様な顔で答へた。彼は先刻から料理が喉を通らない。ふんぶんたる乞食臭にどうにも我慢出來なかつたのである。

この時、よぼよぼの片手のない老乞食が、おそるおそる善兵衛と鐵平の前にすゝみ出た。

『大將。わしはな、この善兵衛さんを知つてる様な様がしますでな。一寸、話してもいゝかね』

と、彼は鐵平にきいた。

『よろしい』

老乞食はあらためて、しげしげと善兵衛を見た。

『はゝはゝ、やつぱり善公だ。なつかしいなあ』

善兵衛はぎよつとして乞食を瞶めた。

『おぼえてるかい。わしとお前さんとは木場の山吹屋で、四十年前に人足をして居たつけな。わしはその時の進吉さ。御主人が死んで後家になつたお内儀さんが、强盗に頭を斬られた大騒

ぎがあつた。俺達はみんな警察へひつぱられる。お前は十日ほど前に行方が知れなくて、そのまゝすんだが、それから俺は病氣してこんなになつた。お前さんが出世してこんなにならうとは思はなかつた。お前も若え時はカツぱらひや窃盗の名人だつたが、はつはつ、夢みてえだのう』

大谷善兵衛の顏色がさつと變つた。

『わしは天下の大谷ぢや』

『わしも天下の乞食だよ』

『爺さん、お前はその四十年前の某とこの大谷とを間違へてるな。人違ひしてゐるな。はゝは、酒のせいぢやらう』

『さうかね、善公』

『爺さん、この大谷は日本屈指の富豪ぢや。あんまり、無禮を云つてはためにならんぞ』

『さうかね、善公』

と、老乞食は首を傾げた。

『をかしいな。わしは人違ひしたつもりはないのだけれど、をかしいな』

『はつはつ、大谷も乞食に間違へられては形なしぢや』

善兵衛は鐵平を見て大口を開けて笑つた。

鐵平の眼が光つた。

老乞食の進吉は、首をふりふり引き下がつた。

この瞬間に、鐵平の頭に電光の如く閃いたものがある。探偵小説の筋は自然に運ばないが、それ以上奇怪の世の中の事實は、自ら秘密を暴露して來る。

『面白い』

鐵平は呟いた。

『はゝはゝ、實に面白いとわしも思ふ』

鐵平と善兵衛とは顏を見合はせた。

善兵衛の眼には、物凄いばかりの殺氣が燃えた。快男兒鐵平の頰は微笑に崩れた。

敵地に乘り込んだだけの値打があつたからである。

『面白い』

と、もう一度、鐵平は呟いた。

『面白い。いや、全く、乞食は面白いものぢや』

『乞食も面白いが金持も面白い。善人も面白いが、惡人はなほ面白い。はゝはゝ』

善兵衛の額にあぶら汗がにじんだ。

『實に暑い』

彼は額をぬぐひながら唾をのんだ。

三

主人と主客の殺氣をふくんだ空氣なぞは、招かれた乞食の一隊にとつては問題ではない。彼等は今、酒を喰つてさながら、天下を取つた樣な氣分であつた。紋付の壯士も、百疊の座敷も糞を喰へ、彼等は樂しくかつさわやかである。

『おい、書生さん。こつちに德利が足りねえから一本廻してくれ』

兵取三太は大勢の壯士のなかでも、最もこの乞食に憤慨した。

『勝手に取れ』

『べら棒め、勝手に取れつたつて、こつちは兩足がねえんだ。取つて一杯酌をしてくんねえ』

と、ゐざりが言つた。

『無禮！』

『な、なにが、無禮だ。お前は書生ぢやねえか。俺達はお客さんだよ』

『な、なにをほざくか。俺どんは天下の志士だばつてん。うぬ等のやうな臭い虫けらと同席は出來んのを、我慢しちよるんだ』

『天下の志士が、乞食にお酌をしては惡いといふ法律があるか』

ゐざりが三太の前へ這ひ寄つた。

『うむ、くさい。これは梅山莊の肥桶の時より堪らん。えゝい、寄るな、寄るな』

兵取三太は逃げようとしたが、ゐざりが彼の足を押へ片手が彼の腕をおさへた。

『さあ、お、俺の盃を受けてくれ』

ゐざりが、盃を突き出した。

『どけい、どけい。とても、堪まらん。うゝむ、くさい。盃など受けられるか』

ゐざりと片眼は、三太の口を割つても、彼等の盃を受けさせようとする。どたん、ばつたん、ゐざりと片眼と三太とは、三ツ巴になつて轉げ廻つた。

遂に三太はゐざりの横面を拳固ではりとばした。

『やい、な、撲りやがつたな』

『おい、兄弟を撲つたな。さあ、かんべんならねえ』

忽ち、乞食の總勢は三太に躍りかかつた。

不具者でも、多勢を合すればなかなか強い。まして、ぷんぷんたる臭氣としらみを撒き散らしての亂痴氣騒ぎに、壯士連はへき易して逃げ込んだ。

乞食は善兵衛の前にずらりと居並んだ。

『且那、お盃を頂戴いたしやす』

『うゝむ』

善兵衛は途方にくれた。最はや逃げの一手のみしかない。だが、彼が座を立てば彼の計畫がくづれる。善兵衛は眼を閉じた。

彼は乞食の盃を受けた。眼を閉じ、息をつめて、ゐざりの盃をのみ、顔をしかめて鼻かけ乞食の盃をのんだ。毒をのむ心地である。

『はつはつ、各會社重役とお近づきの盃を交しましたな。うはゝはゝ』

鐵平は腹を抱へて笑つた。

乞食達はお禮の心で、時を得顔に各々珍藝を開陳した。

ゐざりのおけさ踊り、盲人のどぜうすくひ、鼻かけ片足のかつぼれ。

〜沖の暗いのに白帆が見えるう……

片足がカンガルーの如く、あひるの如くかつぼれを踊り出した時に、一團の壯士がどかどか

と再び座敷に入つて來た。

中なる三人は白鉢巻をし、袴の股立ちを取り、兵取三太がシンとなつて、日本刀を腰にぶち込んで居る。

『客人、劍舞をごらんに入れますたい。ごめん！』

兵取三太は大聲に呼ばはつて、さツと太刀を鞘拂つた。

鞭聲肅々夜過河
曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍

居並んだ壯士達が朗々と吟ずると、三人の壯士は白刃を振り廻して縱横無盡に暴れ始めた。劍舞を舞ふのではなくて、刀で空氣を搔き廻すに等しい。さながら、その姿は狂人に白刃を持たしたやう。

とても、側には居られない。乞食の一隊は悲鳴をあげて逃げ出した。

彼等は次第に恐くなつた。だが、主客月岡鐵平は端然と坐して眉一つ動かさず、その頰には微笑が浮んで居る。鐵平の命令なくして退散しては、恩義ある彼に對して乞食の仁義が許さない。乞食達は蒼くなりながらも、部屋の隅にかたまつてふるへた。

『乞食諸君、最早土產も出まい。そろそろ歸り給へ』

鐵平の鶴の一聲がかゝつた。

『へえ』

彼等は一せいに端座して頭をさげた。

『お有難うございい！』

『はつはつ』

鐵平は、白刃に驚いて逃げ出した乞食の一隊を見送つて笑つた。

と、この時、兵取三太はなにを思つたか、鐵平の眞近に白刃を揮つて踊りながら近づいたが、足を滑らして、いきなり鐵平の膳をひつくり返した。

さつと片膝をたてた鐵平の手には盃が握られ、唸りを生じて三太の眉間にとんだ。

『あつ』

三太は眉間を押へた。血がたらたらと流れた。

『やつたな！』

『おう、やつたぞ。時代離れのした謀殺をたくらんで、貴樣は俺にどうせ斬りかゝるつもりだらう。キツカケはこつちで渡してやつたのだ。はつはつ、古風な喧嘩も面白い。來いよ、蟲け

ら！』

鐵平の聲の終らぬ内に、三太は必殺の息をこめて、

『えい！』

鐵平の眞向から、白刄は流星の如く振りおろされた。

その白刄が正に鐵平の眞向を割らうとする寸前、鐵平は飛鳥の如く飛びのいて、床の間の柱を背に突立つた。

『これ、兵取、やめろ』

善兵衞が叱咤した。

壯士達は遠巻きになつて叫んだ。

『やめろ、兵取』

『亂暴をするな』

『刀をひつこめろ、なにをする。大切なお客さんではないか』

鐵平は留め役の人々をぢろりと見廻した。

『はゝはゝ、留め役までこしらへた芝居か。御念の入つたことだ』

キツとした眼で睨みつけた。

『善兵衞、この男に殺人罪を犯させるつもりだつたんだな。おい、兵取といふ妙な男、君は幾ら金を貰ふか知らんが、一番下らん役目を引受けたな。はゝはゝ、斬れるか、それとも、考へ直すか』

『默れ、俺どんは貴樣が憎い！』

三太は二の太刀を振り上げた。

四

お兼婆さんの容態は刻々に惡化した。

彼女の老いさらばへた魂は、强盜の恐怖によつて、すつかり、すり切れてしまつた。まして、彼女の頭が狂つたのは過去の古傷からである。彼女の他人の物を盜むといふ悲しい癖は、かつて、婆さんが盜まれたものを取りかへすといふ氣持がさせる業であつた。よる年波に體は衰弱してゐたので、最早、助かる見込とてはたゝなかつた。

病勢が進むにつれて、彼女は次第に古い過去の事を憶ひ出した。それと一緒に先頃の强盜事件は一層彼女をおびえさせた。

『あッ、あいつが來る。こないだの强盜もあいつだ。怖いよう、怖いよう』

お兼婆さんはお京を見ると、嬉しさうに笑つた。

『先生、永々お世話になりましたけれど、わしは極樂へ行きますよ。ついてはね、先生、わしはね、先生、わしはね、お前さんの事が氣にかゝる。早く校長先生と御夫婦になつておくれ。先生は縹緻は日本一だし、氣だてはよいし、若いけれどしつかりしてるし、校長先生のいゝお嫁さんだからね』

『お婆さん、そんな事いゝのよ。妾はいつまでもこゝでお婆さんと一緒に働きませう』

と、お京は顏を赤らめて答へた。

『さうはいかない。やれやれ、この世の中はつまらなかつたけれど、一つ極樂へ行きましよ。それでね先生、うちの校長さんは印ばんてんだし、お前さんも元は女工だといふから似合ひの夫婦だからね』

『お婆さん！』

お京は悲しくなつた。彼女は月岡鐵平の人となりを知つた今、そんな事など夢にだに見る事の許されないのを悟つて居た。鐵平は月岡男爵家の相續者である。名門の華族であり、しかも數百萬の富を持ち、氣骨稜々、一世の美丈夫である。お京は父母なき天涯の孤兒で、事實、家もない貧しい街の娘であつた。

雲と泥、お月樣とすつぽんほども身分が違ふ。

『お婆さん、校長先生は華族樣よ、お金持よ』

女心である。思はずさう言つてしまつて、お京はその場にうつ伏した。

『そんな事がなんだね。校長も人間なら、先生も人間でしかも美しい娘だ。大事なことはそれだけだよ。つまり御夫婦になりやいゝのさ。南無まいだあ』

お兼婆さんの單純要を得た言葉が、或は眞理でもあらう。

だが、世の荒浪にもまれ拔いたお京には、悲しいあきらめがあつたのである。

お兼婆さんは、この時、半身を床の上に起した。

『あゝ、さうだ。妾は校長先生に言ふことがある。何もかも思ひ出した。わたしの頭を斬つて金をとつたのは善公だ。わしをこないだ殺しに來たのも善公だ。校長先生！　仇をとつておくれ、わたしの仇を！』

お兼婆さんは絕叫すると同時に、床の上に、ぱつたり倒れた。

『校長先生、校長先生……逢はしておくれ、仇を……』

遂に老婆は聲が出なくなつた。呼吸は次第に細くなつた。

お兼婆さんは、ひしと小さな玉枝にしがみついて慄へた。玉枝はお婆さんの白毛の髪を撫で、そのやせさらばへた肩を抱いた。

『怖くはないわ、お婆さん。玉枝がついてるわ』

『さうだね。玉枝ちやんが居れば、あいつは敵はないんだよ。こないだも玉枝ちやんに叱られて逃げやがつた。ほほほゝ、ざまあ見ろ』

お婆さんはぜいぜいと劇しく肩で息をした。

『お婆ちやん、死んぢやいやよ。玉枝はお婆ちやんが好きよ。又、鬼ごつこや、死球をして遊びませうね。早くよくなつて！』

『南無阿彌陀佛々々々々々々々、玉枝ちやん、お婆さんは死にたくはないよ。玉枝ちやんや不二坊と別れたくはないけどね、佛様のお迎へは仕方がないよ。南無阿彌陀佛』

『お婆ちやん』

玉枝はほろほろと涙をこぼした。

お京は蔭で、二人の會話をきゝながら涙ぐんだ。

氣狂ひ婆、泥棒婆、女スリとして、世間から憎まれるだけ憎まれ、不二雄や玉枝にスリの汚名を着せ、お京にとつては命にも代へ難い鐵平を危ふく煙突から落しさうになつたこの老婆、

今は小兒の如く純情であり、無邪氣である。人の性は善なりといふ言葉をお京はしみじみと感じた。

『ねえ、玉ちやん。わしは極樂へ行つたら蓮の葉つばに乘つて暮すよ』

『いゝわね、極樂はきれいでしよ』

『あゝ、きれいだとも。金色の鳥が飛んで居て、佛様ばつかりで、泥棒なんて居ないよ』

『お池があるんでせう』

『あるよ、きれいなお水のね。その池の蓮の葉の上にわしは乘るんだよ。うらやましいかい』

『うらやましいわ。でも、蓮の葉つて、乘つても破けない程丈夫なの』

『丈夫だともさ。一ぺん、連れてつてやるよ。この次あたりの日曜日にしよう』

『えゝ、連れてつて、でも歸れて』

『さあ、それは一寸わからないよ。きいて見ないと』

『玉枝、歸れないと困るわ。校長先生や、お兄ちやんや、お父さんや、先生に逢へなくなるんですもの』

『困つたね、南無阿彌陀佛』

この時、お京が部屋に入つて來た。

お兼婆さんはお京を見ると、嬉しさうに笑つた。

『先生、永々お世話になりましたけれど、わしは極樂へ行きますよ。ついてはね、先生、わしはね、先生、わしはね、お前さんの事が氣にかゝる。早く校長先生と御夫婦になつておくれ。先生は縹緻は日本一だし、氣だてはよいし、若いけれどしつかりしてるし、校長先生のいゝお嫁さんだからね』

『お婆さん、そんな事いゝのよ。妾はいつまでもこゝでお婆さんと一緒に働きませう』

と、お京は顏を赤らめて答へた。

『さうはいかない。やれやれ、この世の中はつまらなかつたけれど、一つ極樂へ行きましよ。それでね先生、うちの校長さんは印ばんてんだし、お前さんも元は女工だといふから似合ひの夫婦だからね』

『お婆さん！』

お京は悲しくなつた。彼女は月岡鐵平の人となりを知つた今、そんな事など夢にだに見る事の許されないのを悟つて居た。鐵平は月岡男爵家の相續者である。名門の華族であり、しかも數百萬の富を持ち、氣骨稜々、一世の美丈夫である。お京は父母なき天涯の孤兒で、事實、家もない貧しい街の娘であつた。

雲と泥、お月様とすつぽんほども身分が違ふ。

『お婆さん、校長先生は華族様よ、お金持よ』

女心である。思はずさう言つてしまつて、お京はその場にうつ伏した。

『そんな事がなんだね。校長も人間なら、先生も人間でしかも美しい娘だ。大事なことはそれだけだよ。つまり御夫婦になりやいゝのさ。南無まいだあ』

お兼婆さんの單純要を得た言葉が、或は眞理でもあらう。

だが、世の荒浪にもまれ拔いたお京には、悲しいあきらめがあつたのである。

お兼婆さんは、この時、半身を床の上に起した。

『あゝ、さうだ。妾は校長先生に言ふことがある。何もかも思ひ出した。わたしの頭を斬つて金をとつたのは善公だ。わしをこないだ殺しに來たのも善公だ。校長先生！　仇をとつておくれ、わたしの仇を！』

お兼婆さんは絕叫すると同時に、床の上に、ぱつたり倒れた。

『校長先生、校長先生……逢はしておくれ、仇を……』

遂に老婆は聲が出なくなつた。呼吸は次第に細くなつた。

勝敗

一

兵取三太が無言で打ちおろした二の太刀は、鐵平の肩をかすめて、無慚にも、時價三千圓の太柱にざくりと斬り込んだ。

鐵平はすでに床の間を楯に、正に猛虎負蹠の姿勢でにこりと笑つた。

『どうだ、九州、まだ、やつて來るか』

『おう、行かいでかつ』

三太は刀を正眼に構へたが、すでに、斬り込む勇氣がない。聲と構へは大層威勢がいゝが、彼とても又、萬物の靈長たる人間の智慧がある以上敵し得べき相手でないのがわかる。わかつてしまつては、どうにも勇氣が出ない。

考へて見れば、彼は大谷善兵衛のために殺人罪を引きうけた。この報酬一萬圓也。ところでその一萬圓は牢獄に入つてゐては用にたたず、たとへ死刑にならなくても、彼が刑を終へて出て來る時分には、この大谷家に巣喰つた無頼の壯士共の手で、何に化けてしまつてゐるかわからないのである。いはんや、身を捨てゝ善兵衛につくすほどの恩義を感じない。

大谷善兵衛が相手を敬服させるだけの、親分としての素質がないといふ事にも原因する。

處で、今、三太は一萬圓を考へ、牢獄を思ひ浮べながら、白刃をふりかぶつてゐた。

『どうした、九州、割がわるいか』

『なかなか』

『かゝつて來い、報酬はいくら貰へるか』

『一萬でごわす』

『うはつはつ、安い安い』

鐵平は笑つた。

うつかり、鐵平につられて報酬まで言つてしまつた三太は逆上した。

『えゝい、俺どん、ヤケぢやい！』

さつと横に胴を拂つてきた太刀は、鐵平の印ばんてんをかすめて、今度は三太の體が空を泳いだ。

『どつこい』

右足で、彼の腰をどんと蹴つた時、バーン！

一發の銃聲が廣間にひゞきわたつた。

鐵平はひよろりとよろけた。片膝をついてうつ向いてゐたが、そのまゝ崩れる如く、壘にうつ伏した。

善兵衛はピストルをふところにしまひながら、蒼ざめて廣間の中央に立つた。

『わしはやつた。やむを得ん、勝負ぢやからのう』

兵取三太は茫然として倒れた鐵平を瞶めた。

『兵取』と、善兵衛はふところのピストルを、三太に手渡しながら小聲でさゝやいた。

『ピストルでこの男を射殺したのは君だ。後の人間はその證人にする、二萬圓出さう、兵取』

『俺どんがピストルで射つたのでごわすな』

『さうだ』

『なるほど、俺どんも男でごわす。二萬圓、はつはつ、有難い』

三太はにやにや笑つた。

『死體を君の手で片づけるんだ』

『はあ』

三太は動かぬ鐵平をずるずると肩に引きかついだ。

『一代の快男兒も遂にピストルの前に敗れたりか』

彼は重い鐵平をかついで、廣間を横切り、更に廊下をわたつて外に出た。

人間といふものは、大事件に遭ふと逆上する場合がある。この場合、第一に善兵衛が逆上し、つゞいて殺人罪の引受人、兵取三太が逆上してゐたのであつた。

わが身の可愛いのは誰しも同じであるが、善兵衛の如く富を積み、財を重ねて來ると、人一倍わが身が可愛くなつてくる。針の先でつゝいたやうな小さな傷でも、萬一の事を慮つてその手當が大げさであり、くさみが三つ出れば醫師を呼び、三十七度の熱が出れば入院して大事にする。必要以上に自分の體をいたはるのである。いま、善兵衛はわが身が可愛いために、鐵平をピストルで射擊した。

殺人である。善兵衛は倒れた鐵平を見、己の身邊に迫る罰を考へてカツと逆上した。三太は二萬圓の聲に逆上した。何でも罪を引き受け、牢獄へ入れば二萬圓になる。金の亡者は前後の事を考へなかつたのである。

善兵衛は鐵平を射つた瞬間、三太は鐵平のぐにやりとした體を肩にかついだ瞬間、すでに鐵平は死んだものと思ひ込んだのである。

彈がどこに當つたかを三太も考へなければ、善兵衛も自分がどこを射つたかを思ひ出さなか

つた。

『自首すれば罪が輕くなるで、よか、俺どんはこのまゝ警察へ行かう』庭へ出て、裏口へ廻りながら彼は呟いた。

『しかし、わざわざ警察まで運んではかへつてうたぐられる。バレれば大谷善兵衛がやつたんぢやから、俺どん、いよいよ最後には無罪になるが、二萬圓はフイトコぢやい。はて』と、彼は鐵平を肩にかついだまゝ考へ込んだ。

二

お兼婆さんの呼吸は次第に細くなつて行く。

お京は婆さんの顏に死相を見た。

これほど逢ひたがつてゐる鐵平に、逢はせずに死なすことは罪である。そればかりではない。婆さんは死線をさまよひながら、今、一身の祕密の何事かを鐵平に訴へようとしてゐるのだ。

招ばれた醫師は婆さんに注射をして、命はたゞ、時間の問題だと宣告した。

『待つていらつしやい、お婆さん』

お京は立ちあがつて袴をつけた。

彼女は鐵平が大谷善兵衛の邸宅へ乞食を連れて乘りこんだのを知つてゐた。

梅山莊の脫出以來、彼女は大谷の名を聞くだに震へあがつた。だが、今は自分の恐怖を言つてゐる場合ではなかつた。

彼女は夜道を大谷邸へ急いだ。

邸宅の大玄關に立つた時、お京は微かに全身のふるへるのを感じた。こゝは鐵平にとつても敵地である如く、か弱いお京にとつては正に伏魔殿よりも恐しい。

彼女はふるへる手で呼リンを押した。女中の代りに中から出てきたのは紋付羽織の壯士であつた。

『あの、お屋敷に大成園の校長がうかがつてゐるはずでございますが』

壯士はにやりと笑つた。

『ほう、これは珍しい、梅山莊に居たお京ぢやないか。袴をつけて、品がよくなつたな、救世軍の女士官にでもなつたかね』

『あの、大成園の校長は・・・・』

『いや、ますます美しくなつた。これではあの印ばんてんが梅山莊へ略奪に來たのも決して無理ぢやなかつたな』

この聲をきいて、玄關へずらりと壯士が出て來た。

『うむ、これは珍しい』

『えらく別びんさんになつたやないか』

と、關西の壯士が薄笑ひした。

『あの、校長先生はをりませうか』

『まあ、そんな事はええ。時に、もう、結婚したかね』

お京は必死であつた。

『大成園の校長は』

『そんなものは知らんよ。それより、涙ぐましい君の美人ぶりに、うつとりしてゐる處だ』

お京はとりつく、しまがなかつた。

この時、一臺の素晴らしい自動車が大玄關へ横づけになつた。

運轉手はつかつかと玄關に近づいた。

『子爵田中隆太郎閣下のお越しであります』

壯士の一人は運轉手を睨みつけた。

『馬鹿野郎！　また乞食の化けたのを乘せて來やがつたな』

『いゝえ、子爵田中……』

何も知らぬ運轉手が辯解しかけた。

『やかましい、そんな、乞食野郎に用はない』

運轉手がまごまごしてゐると、車中の老紳士はゆつくりと車を下りて玄關に近づいた。

『乞食野郎でもよろしい、主人に取次ぎなさい』

紳士には自らなる威嚴があつた。

『わしは田中ぢや』

だが、先刻以來壯士にとつては自動車でくる客は仇敵であつた。乞食が社長だの、事務だのと名乘つて自動車で乘り込んだばかりか、あらう事かあるまい事か、これに山海の珍味を與へ酌をし、書生々々と呼ばれたうへ、大立廻りを演じて、しらみやら惡臭やらをうつされた恨みがある。身、志を得ず善兵衛の食客となり、小遣を與へられ、時には草履取りとなり、暴力團となり、たいこもちになると雖も、乞食と格鬪し、乞食の酌をしたのは千載の痛恨事であつた。

恨みが深い。

そこで、彼等はこの紳士を乞食の化物と見なした。化物は實に立派であつたが、恨み重なる

壯士には、やはり憎い乞食に見える。

『この野郎、巧く化けやがつた。まだ、酒がくらひ足りないか』

『書生、主人に取次ぎなさい』

嚴たる命令である。

『この野郎、馬鹿に威勢がいゝが、誇大妄想狂かい。歸れ、歸らんと、こん度こそ息の根をとめるぞ』

老紳士はにこにこ笑つた。

『書生、わしは田中ぢや、田中隆太郎ぢや』

この時、大谷善兵衛は鐵平の死體を託した兵取三太が、どんな行動を取つたかを案じて、今後の相談をしようとして廊下に出て、玄關をうかゞつた。

彼は一世一代の富の力を以てしても、敵對の不可能な、財界政界の大立物、田中隆太郎子爵の姿を見つけ出した。

『おゝつ、閣下！』

善兵衛は飛んで出ると平身低頭をした。

『大谷さん、わしは乞食あつかひされてこまつてゐる。はつはつ』

善兵衛は眼をむいて壯士達を叱咤した。

『馬鹿ツ、馬鹿！　大馬鹿……』

壯士達は茫然自失して、その場に直立不動の姿勢をとつた。

『閣下、申しわけございません。處で、夜中また拙宅へ急な御用事でも』

善兵衛は早くも、印ばんてんの校長と、この田中子爵とが歌舞伎座で會見したことを思ひ出したのである。敵、鐵平は葬つたが、第二の敵は壁の如く彼の前に立つた。

『大谷さん、鐵平が來てゐるでせう』

『鐵平と申しますと』

『印ばんてんの男ぢや』

『あつ』

善兵衛は口のなかで叫んだ。

どうして、印ばんてんの來たことを知つてゐたのだらう。すでに、絶對絶命であつた。

『閣下、印ばんてんの男と閣下とは』

『おゝ、わしの甥、月岡鐵平ぢや』

『あ、あの、甥、あの月岡男爵の……』

『月岡の長男ぢや』

『……』善兵衛は唸つた。

三

事こゝに至れば、善兵衛としても死力をつくして戰ふ外はなかつた。

鐵平をピストルで射撃した事は、結局、兵取三太を下手人としても、善兵衛の財界の地位は失はれるのである。田中子爵を向ふに廻して敵とすることは不可能であつた。

『大谷さん、鐵平から今夜、大谷邸へ來てもらひたいと云ふ手紙を貰つたのだ。それによれば、大谷善兵衛氏の一身に關して重大な御相談があるからと云ひ、場合に依つては鐵平が大谷氏と一騎打ちをして命をおとすかも知れんと云ふ。いづれは、あれの茶目だらう、だが放つてもおけんからお伺ひした』

『なるほど、實は閣下、甥御樣をたしかに御招待いたしました。と申すのは大成幼稚園の事業に贊成いたしましたので、若干の寄附をいたさうと思つての事でございます。その節、そこにゐる娘さんなぞの家族を連れておいで下さるやうお手紙いたしましたに對し、事もあらうに、乞食をぞろぞろ連れておいでになつたのでございます。いやその乞食たるや、跛、盲目、兩腕

なし、いざり、なりんばう……しかも酒をのんで大變な亂痴氣騒ぎ、明らかに、私を侮辱するものでございます。すると、私の家にをります書生共が怒つて、中の一人がピストルで甥御を射つたのでございます』

『あつ』

側にゐたお京は蒼白になつて、あやふく倒れさうになつた。

田中子爵はお京をさゝへた。

『娘さん、君は……』

『は、はい、私は月岡樣に救はれた女でございます。幼稚園の保姆をしてをります』

『おゝ、あんたか。鐵平が妻にしたいと言つてゐたのは』

お京は氣も狂はんばかりであつた。鐵平がピストルで射たれたと云ふことは、彼女を地獄につき落したに等しい。

だが田中子爵はあわてなかつた。

『鐵平は正義の子ぢや。大谷さん、あれが單にあんたを侮辱するはずがない。それで、鐵平はどうしたか』

『下手人の書生がついて出て行きました。息があれば、病院へでも參りましたでせう。すでに

絶命してゐるとすれば、警察へ自首いたしましたてせう』

不敵なり、善兵衛。彼は悪鬼の如く冷く言ひ放つた。

田中子爵は眉一つ動かさず善兵衛を睨んだ。

『貴方の云ふ事はそれだけか』

『はい』

『知つてゐるのはそれだけか』

『左様で』

『鐵平の生死は不明だと言ふのだな』

『殘念ながらさう、申し上げる他ありません』

お京は全身をふるはし、袖に顔をうづめて嗚咽した。

一人は財界政界の巨頭、一人は富を一代に築いた辣腕家。善兵衛は迫ひつめられて捨身になつた。田中子爵は甥、鐵平の身を氣づかつて、しばらく、暗然として沈默した。

眞僞は不明であるが、子爵は、何等かの方法によつて、すぐ、事件の中心に入らなければならなかつた。

愛する鐵平が、かくも、簡單に兇手にたふされたとは信じられなかつた。

『よろしい、鐵平はわしの手で探さう。だが、大谷さん、貴方達も、こゝを一歩も動くことはならん』

『なんの權利で命令なさいますか』

『正義の命令ぢや』

田中子爵は斷乎として答へると、靜かにお京をかへり見た。

『娘さん、わしの自動車で警察へ行きなさい』

四

兵取三太は鐵平を背負つて、しばらく、夜空を仰いで思案した。

彼と雖もまだ人を殺した經驗がない。大谷善兵衛の影響で、金錢を命よりも尊いと思ふやうになりはしたが、人殺し請負業までやらうとは彼自身も思はなかつた。

白刃をふるつて、鐵平に斬りつけはしたが忽ち一蹴されて、彼は殺人請負業の恐しさを知つた。齒のたゝぬ相手が、もし、刀を奪つて己を一刀の下に斬つて捨てたとしたら、一萬圓も夢なら、すべては泡と消へて彼は死ぬのである。その上、相手は正當防衛である。割がわるいと思つた瞬間、ピストルが鳴つて、相手が倒れた。

忽ち二萬圓に値があがつて下手人の請負をやつたが、牢獄へ金は持つて行かれない。持つて行つても、牢獄にはカフエーなく、料理屋なく、別莊なく、絹の蒲團もない。

『はて、俺どんの進退は谷まつたばい』

彼は夜空を仰いで歎息した。

『谷まらんぞ、九州！』

聲は彼の背中でした。

兵取三太は腹のへつた時、耳元でサイレンを鳴らされた樣に驚いて、鐵平をおぶつたなり、その場に腰を拔かした。

鐵平は腰の拔けた三太から、ぽんと飛びのいて、ニコニコ笑つた。

『九州、元氣を出せ』

『はあ』

『俺が死んだと思つてゐたか。善兵衞の彈が俺に當ると思ふか、馬鹿。しかし、最初の一發は當らないが、飛び道具は二發目が危いから、一寸、倒れて醉ひをさましてゐた。二萬圓でこゝまで運び出して夜風にあてゝくれたのは感謝するぞ』

『はあ』

三太は茫然として地面に坐つたまゝ、開いた口がふさがらない。

『第一、彈が當つたか、當らないか調べてみない處は、善兵衞も貴樣も低腦だぞ』

『なるほど』

『感心する奴があるか。どうだ、もう一度戰ふか』

『とても、いけません。俺どんはおはんの敵ではごわせん』

『はつはつ』

『梅山莊で肥桶をあびせられた時から、俺どんはおはんの相手ではごわせんでした。おはんの樣な大人物の足許へは、兵取三太如きは這ひ寄れも出來ん、全くでごわす。俺どんは痴けですわい。おはんの氣質、その正義心にうたれながら、俺どんは金が欲しいばかりに惡に與し申した、情ない男でごわす』

三太は眼に一ぱい涙をためた。

『本心か、九州』

『嘘に泣けるか、俺どんは役者ぢやなけん。併しのう、大人物、正直、俺どんは今、おはんが生きてゐた時は嬉しかつたばい。殺した人間が生きてゐて嬉しかつたなぞとは、少々おかしかろが、正直な告白でごわす。どりや、俺どんはこれから、自首して惡を清算して來ますばい、

はつはつ、二萬圓の夢破れて、兵取三太、初めて男でごわす』

彼はひよろりと立ちあがつた。

『待て、九州、君は赦される』

『いや、俺どんは暴力、ゆすり、たかりを大分やつちよる。清算しますばい』

『待て』

鐵平は側の燈籠に腰をかけた。

『九州、君は青雲の志を抱いて故郷を出たんだらう。故郷には兩親があるのか』

『母……母親が生きてますばい』

『そのお母さんは君の出世を待つて、首を長くして、毎日を暮してゐると思はんか。君が二萬圓で人殺しを引受たなぞ、どうして考へよう。人道にもどる惡業をやらうと夢考へるものか。君が二萬圓のその金をお母さんに與へて、お母さんはよろこぶと思ふか。それより、君が下足番でも、門番でもして働いた金ならよし一圓でも、お母さんは泣いてよろこぶに違ひあるまい、君も氣持がよからう。九州、お互に、前途は洋々たるものだ。君も日本を背負つて立つ人物になれ、今からでも、なれるぞ。故郷のお母さんは君がゴロツキになるなぞとは思はず、大臣になると思ひ暮して居るだらう』

『思つとる、思つとりますばい』

三太の兩眼から、涙は滴々として地面にしたゝり落ちた。

『僕の家へ來い、僕と一緒に働かう』

『おはんの家へ……では、俺どんを許して下さるか』

『許すの許さないのと云ふほど、大した事ぢやない』

『殺さうとしたでごわすぞ』

『はつはつ、改悛すれや大した事でもあるまいよ』

『おはん、大人物でごわすなあ』

兵取三太は涙の溜つた眼をあげて、鐵平の顏を仰いで感歎した。

五

お京は子爵の命に涙をふいて、一歩踏み出した。

このとき、玄關脇の繁みを分けて、のつそりと一つの黑い影が現れた。

『伯父樣、ご苦勞でございました』

明朗、眞晝の如き鐵平の聲であつた。

お京はいきなり、鐵兵の側へ走り寄らうとして、ハツとして思ひとゞまつた。伯父、田中子爵に氣づいたのである。

『鐵平、これは何事ぢや』

『はいはい、伯父様、世の財産家輩に、大谷善兵衛如き惡黨もある事を、斯界の權威者田中子爵に、參考の爲ごらんに入れたかつたのです』

『馬鹿め、わしをわざわざ引つぱり出して……ピストルで射たれたか』

『はあ、土に當りました』

『土に？』

『私の頭の毛をかすめて、廊下を飛んで庭の土へです。老人では手がふるへて、なかなか當らんのです』

『老人！』

『左様、射擊手は天下の富豪大谷善兵衛』

『うゝむ』田中子爵はうなづいた。

お京はその隙に鐵平に近づいた。子爵は微笑した。

『鐵平、その娘さんは泣いてをつたぞ』

『はあ、恐れ入りました』

お京は小聲で、お兼婆さんの危篤と、その歎願を鐵平に告げた。

大谷善兵衛は眼をむいて兵取三太を睨んだ。

遂に勝敗の色は判然とした。三太をにくむべきか、運命を憎むべきか。

三太は壯士や善兵衛の恨み多い眼に射られながら、胸をはつて、ぽんぽんとたゝいた。

『俺どんは、今や正義の士でごわすぞ。何も怖れんばい』

鐵平はお京の言葉をきき終ると、つかつかと善兵衛に近づいて、その首玉へ片腕をまいて、ずるずると引き出した。

『く、苦しい、な、なにをする、く、くるしい』

『大丈夫だ。ピストルの様に命はなくならん。伯父様、自動車を拜借します。いづれ、後ほどお詫びに伺ひます』

聲と共に、善兵衛を引きづつたまゝ自動車に乘り込んで、風のごとく鐵平は去つた。

壯士達は思はず動かうとした。逃げたかつたのである。

このとき、田中子爵が彼等の前に毅然として立ちふさがつた。

『動くな、書生ども！』

壯士達の顏は蒼ざめて、この威嚴ある老紳士の前に不動金しばり、動きもならず首を垂れたのである。

清風颯々

一

東天を薔薇色にそめて、夜は正に明ようとしてゐた。

朝は生々とした活動の喜びにひたる時である。

だが、お兼婆さんはこの喜びの曉にこの世を去らうとしてゐた。枯木のくちる時はどんな力も役にたゝない。

『お婆さん、死ぬんぢやないわ』

と、玉枝はお兼婆さんの枕頭で言ひつゞけては泣いた。この老いたる園兒は玉枝のなつかしい友達であり、年は十倍も上であるが、頭が狂つてゐるために世話のやける妹でもあつた。

お兼婆さんはすでに、雀の學校の先生を歌ふ氣力もない。デツト・ボールをやれさうにもない。これは彼女にとつて悲しいことであつた。かつて、兄の富士雄をスリにし、校長先生を煙

突から落しさうにした、この婆さんを憎むことを忘れて、玉枝は婆さんを限りなく愛してゐたのである。

今、婆さんは息を引取りさうであつた。

校長先生を迎へに行つたお京も歸らなければ、校長の鐵平も歸らない。二人が歸つて來ればお婆さんが助かりさうな氣がしてゐたのであるが、それも、おぼつかない希望であつた。

この時、外で自動車がとまつた。

鐵平は一人の老人の首筋に腕をまきつけて、急いで病室に入つて來た。

『婆さん、お前の仇の善公を連れて來たぞ』

大谷善兵衛は蒼白になつてその場にうづくまつた。

『善兵衛、顏を上げろ』

鐵平は大喝した。

『わしはなにも知らん』

『善兵衛、君の前身を知つてゐる者がこゝに二人ゐる。一人はお兼婆さんで、一人は四十年前に木場の山吹屋にゐた乞食の進吉だ。進吉はこの大成園に泊つてゐる。呼ばう』

『わしはなにも知らない』

と、善兵衛は額にあぶら汗を浮べて唸つた。

玉枝は善兵衛をしげしげと見た。

『先生、このお爺さんはこないだ、お婆さんをころしに來た强盗さんにそつくりよ』

『その通りだ』

鐵平は大きく頷いた。

『大谷善兵衛、君は愚だぞ。人間には天命がある。天知る、地知る、人知る。君の罪業はおほふべくもないのだ』

『わしは、わしはなにも知らん』

善兵衛はうめくが如くに叫んだ。

『なんの證據があつて、それを言ふか。わしが君を憎んだことはほんとだ。殺さうとした。男と男の戰ひだからだ。だが、わしはこの老婆を知らん、昔がどうの、かうのと、一體、なんの證據があつて云ふ。證據を出してくれい、證據を』

お兼婆さんはぽかりと眼を開いた。

まじまじと善兵衛の顏を瞶めた。

『善公かい、たうとう、詫びに來たね』

と、お兼婆さんは靜かに言つた。

『善公、お前もすつかり歳をとつてしまつたね、可哀さうに。妾を玄能でなぐつて逃げた時から、苦勞をしたんだね。すまない、詫びよう、さう思つてゐたんだらう。妾はね、今、なにも思ひ出したよ。許してやるよ、許してやるよ。お前がお金を欲がつた時に、やればよかつたのに、妾はやらなかつた。お前はいゝ若い者だつたけれど、怠け者だつたね。善公、もう、悪い事をするんぢやないよ、許してやるからね。妾はお前を仇と思つた。とられた金を取り返さうと思つて、人のものを盗んだり、スリをしたりしたけれど、つまらなかつた。ほんとに嬉しいのは子供達と一緒に、雀の學校の先生は、鞭をふりふりチイパツパと歌つて遊ぶことさ。善公もお歌ひ、さあ、昔の事は忘れようね。チイチイパツパ、チイパツパ……妾は幸福だよ、南無まいだ』

お兼婆さんの息は安らかに、最後のお題目と共にとまつた。

人の死なんとするやその言よし！

千萬言の論告よりも、地獄の拷問よりも人を動かすものは、たつた一つの「眞實」である。

玉枝はお兼婆さんにすがつてわつと泣いた。

善兵衛の眼が涙のために硝子をはつたやうに光つた。

『お内儀さん！』

二

善兵衛は腸からしぼり出るやうな聲で言ふと、今は聲なきお兼婆さんの枕頭にガバと兩手をついた。

『なぜ、わしを人殺しと呼んでくれなかつた。強盗と呼んでくれなかつた。わしは木場の山吹屋の女主人であつたあんたを、玄能でなぐつた強盗犯人ぢや。なぜ許すと云ふのだ。あんたを乞食にし、氣狂ひにして、わしは世を僞つて富豪になつた。その、わしを許すといふのか、許してくれるのか、お内儀さん！　言つてくれい。わしはどうすればいゝのだ』

併し、お兼婆さんは答へなかつた。彼女の死顔はさながら美しき幼兒の眠れる如く平和であつた。

三十有餘年前の恐るべき犯罪は、曉の光のなかにその正體をさらした。

『月岡さん、わしは木場の人足だつた。山吹屋の主人に可愛がられ、その死後は後家のこのお兼さんに可愛がられた』

善兵衛の善公は惡癖のバクチのため常に金に窮した。彼はお兼に幾度か無心をしてゐたが、

ある日、これを斷られて、カツとして山吹屋を飛び出した。併し怠け者には更生の途がない。彼は再び金に窮して、ある夜、山吹屋に忍び込んでお兼を脅迫した。氣丈なお兼は、敢然善公の非をさとして金を與へない。怒れる善公はかくし持つてゐた玄能でお兼の腦天に一擊を加へた。この夜からお兼は生命こそ助かつたが、一生の狂人となつた。金を奪つた善公は大連に飛び、滿洲にもぐつて商賣をしてゐるうちに幸運は彼を大商人にした。

人の運命といふものは、思ひもよらぬ方向を取る時がある。運はハズミである。不運は一足違ひで彼をとり逃がした。警察の手は彼を常に一足違ひで見逃がし、幸運は彼を到る處で捉へた。大商人大谷善兵衛は、惡德の上に築いた巨大の富を以つて、己の過去を雲の彼方に追ひやつた。

平和なる數十年が流れ、彼はいつか自己の罪惡を忘れんとした。この時、一人の印ばん纏が現れたのだ。

月岡鐵平こそ、善兵衛にとつては、天から降つた樣な不運であつた。彼の眼は檢事の如く鋭く、彼の力は鐵の如く強い。

善兵衛も最初は、單に彼からお京を奪つた若者として鐵平を憎んだ。次に、たゞ者でないと感じて怖れてゐるうちに、鐵平こそ敵であると思つた。ついで、煙突から鐵平の手で降された

お兼婆さんを見た時に、善兵衛は忘れんとしてゐた過去の犯罪を眼の前に見せられたのであつた。

彼は鐵平を殺さうとした。彼の眼が光つてゐる限り、善兵衛には滅亡がある。喰ふか、喰はれるか、善兵衛は無頼の徒を使ひ、壯士を用ひ、あらゆる手段で彼を亡き者にしようとした。が、鐵平は不死身であつた。

オートバイをぶつつけて、鐵平を入院さした夜、善兵衛は自ら黑裝束をつけて、元の强盗になつた。天下の大富豪が强盗を働くとは、何人も考へないことに眼をつけた。犯罪は人の意表に出るに限る。彼は大成園に忍び込んで、お兼婆さんを殺害しようとした。

そこには神の如き玉枝がゐた。

その純情に抗すべき刄を、流石の善兵衛も持つて居なかつたのである。

お兼婆さんは救はれた。善兵衛の恐怖は日ましに深くなつた。遂に彼は、自己のピストルで鐵平を射つた。

鐵平は死せずして、彼善兵衛は裁きの庭たるお兼婆さんの死の枕頭に坐らされたのである。

お兼婆さんの言葉は、三十有餘年前のお内儀の如くやさしかつた。

『許してやるよ、善公！』

遂に、善兵衛の惡心はその一言で踏みつぶされた。拷問よりも力强いものは人の眞情であつた。

『月岡さん、わしは警察へ行かう』

と、善兵衛はぴよろりと起つた。

『お兼婆さんは許してくれたのだ。行きなさい！　今度は世の中に許しを乞ふ時だ』

鐵平は外を指さした。

『うむ、行かう。わしは行かう』

善兵衛は外に出た。

朝の工場地帶は活氣があふれ、街路に射す朝日は一日の勞働を祝福するかの如く、溫かい光の海になつて人々をうるほす。ずらりとならんだ長屋からは朝餉の煙がのぼり、辨當箱を片手にした職工や女工の群れは三々伍々、肩をならべて親しげに工場の門へいそぐ。

貧しくとも明るい人々の群れ。

數千萬金を積めども心暗き大富豪の善兵衛は、その人々の間に交つて、ひよろ〳〵と歩いて行つたが、彼は、とある工場の門前に今、多くの職工達が群れてゐるのを見つけると、駈けて行つて、その門前の大地に坐つて人々におぢぎをした。深く、低く、さながら乞食のやうに！

『わしは強盗だ。わしは人を殺して金を奪つた。みなさん、石で、足で、手で、わしを撲つて下さい。踏みつぶして下さい。わしは人殺しだ』

さう叫んだ時、彼は三十年の重荷がおりた安らかさを覺へた。

彼は大地にすがりついて涙を流した。

その工場の門柱には「大和工業株式會社」といかめしく書かれてゐた。彼善兵衛の會社の一つだ。その大煙突から何時もの如く、黒煙がもくもくとあがつてゐた。

その背後に兩腕を組んで默然と立つた印ばん纏は月岡鐵平であつた。

善兵衛はそこを去つて、又も、次の人の群れの中に入つて行つては、大地にひざまづいて告白した。次から次へ、遂に善兵衛は精根を使ひはたし、それと共に、限りない安心に疲れて大道に倒れた。

『わしは人殺しだ！』

善兵衛は氣絶した。

鐵平は靜かに、兩腕に善兵衛を抱き上げた。

『この男は救はれた！』

彼の顏は歡喜にかゞやいた。

三

大成幼稚園はお京の他に、更に一人のやさしい保姆を迎へた。

お春であつた。

洋裝のぴたりと身についた彼女と、紫の袴を胸高にしめたお京の美しい姿は大成幼稚園を明るくした。

お春は鐵平の度々の希望にもかゝはらず月岡家には歸らなかつた。

『お兄樣』

彼女はやうやく鐵平を若樣と呼ぶことをやめた。

『私、月岡家へ歸つたつもりで、この大成幼稚園を經營します。許して下さいますね』

『うむ』

鐵平は唸つた。

お春の要求をこれ以上曲げることは出來ない。

やむなく、彼はお春に大成幼稚園をまかせ、田所清次には、彼が貧民のために建てた「大成アパート」の經營をまかせた。

『お兄様、一人餘りましたわ』

と、お春が言つた。

鐵平は相變らず印ばん纏のまま、貧しい人々の救濟に飛び歩いて、殆ど、席のあたゝまる暇がなかつた。ある日義妹の春子は、久しぶりで幼稚園の遊動園木に腰をかけて讀書にふける鐵平に言つた。

『ねえ、お兄様、おわかりになります？　一人餘りましたわ』

お春は彼女と共にならんで遊動園木に腰をかけた、姉妹のやうに仲よしになつたお京をちらりと見て言つた。

『なにが餘つたんだ』

『人間ですわ』

『餘つたら、なにかに使へばいゝ』

『でもね、幼稚園は私の經營でせう。大成アパートは田所さんの經營でせう。すると、お京さんはなにを經營しますの。餘りましたわ、邪魔ですわ、妾』

『勢力あらそひはいかん』

鐵平は大喝した。

『ですから、お兄様、お京さんにも經營する處をあげて下さいな』

『もう一つ、幼稚園をつくるのか』

『幼稚園は澤山よ』

『アパートか』

『アパートの經營なんか女には無理ですわ』

『勝手にしろ』

『ねえ、お兄様、お京さんに家庭を經營さして下さいな』

『どこの家庭だ』

『お兄様の御家庭、月岡家の奥様！』

この時、お京はやにはに駈け出した。

『いけません、いけません。私はいやしい女です！　いやしい……』

お京は涙をこぼしながら、雨天體操場に飛び込んで乙女らしく、嗚咽した。

「印ばん纏」鐵平は、一と皮むけば彼女には近づき難い月岡男爵家の嫡男である。

彼女は自らをはぢた。女工をやり、女中をやり、酌婦にまでされようとした我が身と鐵平を思ひくらべて恥ぢたのである。

その夜、お京はお春の隙をうかゞつて、この大成幼稚園を出た。

彼女の祖父、山口進五郎は、彼女の足手まとひになるのを察して飄然として、遍路の人となつた。

お京は己も祖父のあとを追はうと思つた。彼女も亦、身分の卑しい自分が、鐵平の足手まとひになる事を怖れたのである。

工場地帶の夜は晝間の騒然たるにくらべて、一きは靜寂であつた。

彼女は月影を踏んで當もなく歩を運んだ。

この時、一人の巡禮姿の老人が前方から彼女に近づいた。

『お京ぢやないか』

お京はうなだれた顏をあげた。

『あゝ、お祖父さん！』

『やれやれ、大きくなつたのう』

進五郎はお京の肩を抱いた。

『お祖父さん、妾も巡禮に連て行つてね』

と、お京は進五郎の胸のなかで言つた。

『やつとめぐり逢つたお前が、そんなこと言ふやうでは幸福にはならなかつたのかへ、やれやれ』

と、進五郎は溜息をついた。

『いゝえ、幸福なの。幸福だつたの。だから、この幸福をそのまゝ心のなかに入れてお遍路になるのよ』

お京の瞳に涙が浮いた。

『若い娘のいふ事はわしにはわからない。ハイカラでなあ』

進五郎は悲しげに首を振つた。

『併し、わしはお前に逆ふまい。どこへでも行かう』

四

世の中を達觀し去つた進五郎老人はお京と並んで歩き出した。

一臺の自動車が二人を追ひ越した。

運轉手は通り越してから、車をとめて、運轉臺から首を出した。

『お京先生ぢやごわせんか』

運轉手は大前田虎五郎であつた。

『どこへ行きなさるね』

『遠くへ』

『ちやあ、乘つて行くがいゝやね。無代で乘られるのは慣れつこなんだから』

『有難う。でも、いゝのよ』

『おや、先生、泣いてるね。はゝあ、校長先生と喧嘩したか』

『いゝえ』

『をかしいね。その巡禮のお爺さんは幼稚園に入る生徒かい』

『いゝえ、私のお祖父さんよ。さようなら、大前田さん』

顏をそむけてお京は歩み去つた。

『豐臣秀吉曰くだね、若き娘の涙は、曰くいんねん故事來歷、神祕不可思議なりとな。こいつは、しるしばん纏の大先生に限る』

彼は我が意を得たりとハンドルを廻して、古びたフォードを元の道へかへした。

『ムツソリーニ曰く、お京先生は結婚適齡期なり』

お京と進五郎がものゝ二町も歩んだと思ふ時、彈丸の如く月岡鐵平は祖父と孫娘の前に飛ん

で來た。

『おゝ、月岡さん！』

進五郎は歡喜の聲を上げた。

『御老人！　巡禮のお供には別の人間をお願ひする。お京さんは僕が借りる』

『お京の代りにわしは誰と巡禮に出るのかね』

『まあ、待ち給へ。君は、ちよいと、こつちへ來るのだ』

鐵平はお京の手をぐいとひつぱつて、十米ほど歩いた。

『なぜ、逃げるか』

鐵平はお京の肩を兩手でつかんでゆすぶつた。肩胛骨が折れるばかりである。この時の痛みはお京にとつて一生忘れ得ぬ痛みであつた。

『妾、いやしい自分の……』

『もう、言ふな。君は僕の所へ歸るか歸らんか』

『……』

『答へは簡單である。然りか否か』

『……』

『歸るか、歸らんか！』

遂に鐵平は怒號した。

併し、この返事は彼には然りか、否かではきくことが出來なかつた。

お京は大きく頷くとわつと聲をあげて、鐵平の鋼鐵の如き胸のなかにすがつて泣いたからであつた。

この時、自動車のヘツトライトがさつと二人の姿を映し出した。

大前田虎五郎はしづしづと鐵平に近づいた。

『校長先生、自動車でお迎ひに參りました』

『馬鹿！』

五

一年は過ぎた。

麹町の月岡男爵家には久しぶりに電氣が明るくきらめいてゐた。

その應接間に卓子を圍んで、つゝましく身だしなみしたお京と、今日こそは男爵らしい氣品を現した紋付姿の鐵平とが並んで居た。これにつゞいて弟の誠、田中隆太郎子爵、春子。

これだけの人數が今、和氣に滿ちて談笑してゐた。

門の處には二つ帽子のとんぼの金助が、印ばん纏姿で悠然と兩腕を組んで立つてゐた。

この姿は鐵平にあやかるために、彼が好んでする姿勢であつた。

二人の遍路姿の老人が門に立つた。

『今夜が婚禮と聞いたので、はるばる東京へ舞ひもどつたのに、これは淋しすぎますぞ、善さん！』

と、一人の老人が他をかへり見た。

『左樣、しかし、これがあの人らしい處でせう。陰ながらお祝ひしませう』

答へたのは大谷善兵衛であつた。

彼は鐵平に依つて救はれたのである。大富豪から、殺人犯におちた時に、同時に、彼が眞人間に立ち返つた時に、鐵平は彼を救つた。善兵衛の事業は田中子爵によつて公共團體の經營にうつされた。

善兵衛は世を捨てた。

鐵平が、お京の代りに、別の人間をお願ひすると進五郎老人に言つたのは、實に善兵衛であつた。

とんぼの金助は腹がけのどんぶりから、二枚の銅貨を出して、この二人の老人に喜捨した。

『今夜は、こゝの御婚禮ときいたのだが、大層、靜かで』

『左樣、月岡家の主義である。外見よりも內容を尊ぶのだ。僕は當家の門番である』

とんぼの金助は威容をたゞして言つた。

二人の遍路は鈴を鳴らした。

『やれやれ、幸福になあ。善兵衞さん、お祝ひに般若湯をわしらもやりませう』

二人の老人は肅然として、鈴をならした。

二人の古風な御詠歌は宵の街を何處までも流れて行く。

この聲を、お京と共に、きくや聞かずや鐵平は……

月岡家の應接間からは鐵平の快活たる笑ひ聲が庭園の植込みへひびきわたつた。

（完）

昭和十五年八月廿五日印刷
昭和十五年八月廿九日發行

現代の英雄…奥付

定價　金五十錢

著者　富田常雄

發行者　東京市日本橋區本町三丁目九番地　株式會社博文館　大橋進一

印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八　大橋光吉

共同印刷株式會社印刷

博文館文庫

發行所　株式會社　博文館
東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番
電話日本橋(24)代二三〇一番(6)

博文館文庫（目錄）

論語　博文館編輯局　吾
孝經　井上鱗吉　吾
太平記（上）　博文館編輯局　吾
太平記（中）　博文館編輯局　吾
太平記（下）　博文館編輯局　吾
小公子　若松賤子　四〇
黃菊白菊　大町桂月　三五
通俗三國誌（一）　博文館編輯局　六〇
通俗三國誌（二）　博文館編輯局　六〇
通俗三國誌（三）　博文館編輯局　六〇
通俗三國誌（四）　博文館編輯局　六〇
通俗三國誌（五）　博文館編輯局　六〇
通俗三國誌（六）　博文館編輯局　六〇
新編水滸傳（一）　博文館編輯局　六〇
新編水滸傳（二）　博文館編輯局　六〇
新編水滸傳（三）　博文館編輯局　六〇
新編水滸傳（四）　博文館編輯局　六〇
西遊記（上）　博文館編輯局　吾
西遊記（下）　博文館編輯局　吾
東遊記　白井鵬二　三五
新版天保水滸傳　黑部漢一　四〇
北支讀本　博文館編輯局　四〇
鳴門秘帖（上）　吉川英治　吾
鳴門秘帖（中）　吉川英治　吾
鳴門秘帖（下）　吉川英治　吾
龍虎八天狗（上）　吉川英治　吾
龍虎八天狗（下）　吉川英治　吾
女來也　吉川英治　吾
風神門　吉川英治　三〇
幻の義賊　大佛次郎　吾
鞍馬天狗餘聞　大佛次郎　吾
鞍馬天狗餘燼　大佛次郎　吾
山嶽黨奇談（前）　大佛次郎　三五
山嶽黨奇談（後）　大佛次郎　三五
地獄の門　大佛次郎　四〇
宗十郎頭巾　大佛次郎　三五
若殿五十三次　古屋里　桑山　四〇
鬼ヶ城の寶庫　黑部漢一　四〇
角兵衛獅子　大佛次郎　三五
照る日くもる日（上）　大佛次郎　吾
照る日くもる日（中）　大佛次郎　吾
照る日くもる日（下）　大佛次郎　吾
右門捕物帖　佐々木味津三　三〇
旗本退屈男　佐々木味津三　三〇
黃昏地藏　子母澤寛　三〇
突っかけ侍（前）　子母澤寛　六〇
突っかけ侍（後）　子母澤寛　三五
錢形平次　野村胡堂　吾
江戸捕物帖　横溝・野村・佐々木・岡本　三五
寶海の音樂師　吉川英治　吾
百萬兩の佳人　野村無名庵　三五
新編大岡捕物帖　野村無名庵　三五
大江戸幻日記　三好季雄　三五
大岡八幡船の美女　三好季雄　三五
敗談
青空無限城（前）　三上於菟吉　三五
青空無限城（後）　三上於菟吉　三五
葛木曾棧（上）　國枝史郎　吾

蔦葛木曾棧〔中〕　國枝史郎　五〇
大金塊　黒岩涙香　二五
島の娘〔前〕　黒岩涙香　四五
島の娘〔後〕　黒岩涙香　四五
捨小舟〔前〕　黒岩涙香　五〇
捨小舟〔後〕　黒岩涙香　五〇
幽靈塔〔前〕　黒岩涙香　四五
東洋武俠團　押川春浪　五〇
塔中の怪　押川春浪　三五
新日本島　押川春浪　三五
武俠艦隊　押川春浪　五〇
海底軍艦　押川春浪　三〇
武俠の日本　押川春浪　四五
怪人鐵塔　押川春浪　三〇
海洋小說集　櫻井鴎村譯　五〇

冒險小說集　櫻井鴎村譯　四五
雄飛小說集　櫻井鴎村譯　五〇
仇討どよみ　山手樹一郎　六〇
現代の英雄　富田常雄　五〇
南海の雌豹　佐山英太郎　六〇
源太時雨　長谷川伸　四〇
ユーモア小說　特務兵の妖　小山經吉　四五
覺經・五人の探偵　龍一郎譯　五〇
人猿タアザン　天岡虎雄譯　三五
ジゴマ　久生十蘭譯　五〇
ファントマ　久生十蘭譯　五〇
ルレタビーユ　久生十蘭譯　五〇
書類第百十三　田中早苗譯　四五
義賊ラッフルズ　田中早苗譯　五〇
青蠅　田中早苗譯　五〇

笑ふ髑髏　田中早苗譯　四五
海底の黃金　妹尾韶夫譯　四五
人間豹　妹尾韶夫譯　三五
青い甲蟲　妹尾韶夫譯　三五
猿人島　妹尾韶夫譯　四〇
赤い道化師　妹尾韶夫譯　三五
灰色の幻　妹尾韶夫譯　四五
鎭の環　水谷準譯　三〇
天國の門　吉田甲子太郎譯　三〇
渦卷く濃霧　延原謙譯　三〇
緣のダイヤ　延原謙譯　三〇
バスカーヴィルの犬　延原謙譯　三〇
リンクスの殺人事件　延原謙譯　三〇
ゲリイン家惨殺事件　平林初之輔譯　四〇
シシリアの貴族　上塚貞雄譯　三〇

二輪馬車の秘密　橫溝正史譯　三〇
スミルノ博士の日記　小酒井不木譯　二〇
月長石　森下雨村譯　三〇
將棋玉圖　花田長太郎解　二五
將棋精妙　花田長太郎解　二五
將棋圖巧　花田長太郎解　二五
古今名局詳解〔寶曆ヨリ明治〕　土居市太郎　二五
古今名局詳解〔享保中心篇〕　土居市太郎　二五
古今名局詳解〔近代中心篇〕　土居市太郎　二五
將棋學初步　建部和歌夫　二五
初學將棋讀本　建部和歌夫　二五
詰將棋五十番　塚田正夫　二五
寄せの手筋　梶一郎　二五
開戰の時機　梶一郎　二五
昭和實戰棋集　小泉繁吉　三〇
最新角落講義　小泉繁吉　二五

404
495

飛車落定跡新講　小泉徐吉著
碁定石　湖原正廣著
互先定石（一間挟・二間挟）湖原正廣著
スキー術入門　小島六郎著
北關東日歸り旅行案内　豊島翠郷著
盆栽入門　農業世界編輯局著
春の盆栽　農業世界編輯局著
夏の盆栽　農業世界編輯局著
秋の盆栽　農業世界編輯局著
冬の盆栽　農業世界編輯局著
小品及小物盆栽　農業世界編輯局著
盆栽樹形寫眞百鑑　農業世界編輯局著
萬年青と蘭　農業世界編輯局著
棕梠竹と觀音竹　農業世界編輯局著
大菊の作り方　農業世界編輯局著
小菊の盆栽　農業世界編輯局著
朝顔の作り方　農業世界編輯局著
草花二百種の作り方　農業世界編輯局著
菊の作り方　農業世界編輯局著
鶏の飼ひ方　農業世界編輯局著
兎の飼ひ方　農業世界編輯局著
春播春植草花二百種　農業世界編輯局著
園藝術奥傳圖解　農業世界編輯局著
トマトと甜瓜　農業世界編輯局著
仙人掌の作り方　農業世界編輯局著
切花の作り方　農業世界編輯局著
果樹の作り方（前）　農業世界編輯局著
果樹の作り方（後）　農業世界編輯局著
藥草家庭療法　農業世界編輯局著
皐月の作り方　田中啓文著

【以下續刊】

終